

# 2018年度 フィリピン実習報告

担当：杉井 信

## 概要

2018年度のフィールド実習（海外）は、フィリピンで実施した。

実習期間は2019年2月13日から20日までの8日間であり、参加学生は6名、引率教員は2名（杉井信、八木祐子）で、マニラとバギオの2箇所に滞在した。

今回の実習では、「フィリピンの歴史・文化の学び」と「参加学生と現地学生との学び合い（共同研究活動）」を柱とし、これに関わる様々な活動を行った。

主要滞在地のバギオは、アメリカ植民地時代に建設された高原都市で、様々な先住民族が住むルソン島北部山岳地域の中心地である。この都市の特徴を実習でも活かし、様々な施設において、先住民の伝統文化を学んだり、それに影響を受けた様々な現代アートを鑑賞した（2月15日）。また、現地日系人団体（北ルソン比日基金）の協力で、同団体に関係する約100人の現地学生（高校、大学）に向けて日本の文化を英語で紹介する報告会（2月17日）を開催するとともに、同団体の学生十数名と協力し、フィリピン文化に関する実地調査（2月16,17日）をバギオ市内で実施し、調査結果を報告会のなかで紹介した。

もう1つの滞在地、首都のマニラではスペインの植民地支配や独立運動にかかわる史跡や資料館、博物館を訪問し、世界文化遺産「フィリピンのバロック様式教会群」の1つ、聖アグスチン教会なども見学した（2月19日）。

## 日本文化の調査と発表

参加学生は、一人ずつ、発表テーマを決めて簡単な調査を行い、英文の発表原稿とパワーポイントファイルを準備した。この発表準備のために、「実習事前指導」の多くの時間を割くこととなったが、そのおかげで、日本についてほとんど知識のないフィリピン人学生にも分かりやすい原稿や資料が作成できたと考えている。学生の発表テーマは以下のとおりであった。

- ・日本の屋台
- ・福笑い
- ・駅伝
- ・着物
- ・秋田の自然と文化
- ・お正月

## フィリピン文化の調査と報告

参加学生は、それぞれ、前記発表課題と関連するフィリピン文化の研究テーマを1つ決め、それについて、日本での予備学習およびバギオ市での実地調査を行った。実地調査は2日間で、日本人学生1名・フィリピン人学生2名の3人1組で行動した。日本人学生は、期間中、どこどこを訪問し何をするか、事前にパートナーとメールで相談した上で現地入りしたし、またフィリピン人学生も案内・紹介の計画を十分に練ってくれていたのも、（英語でうまく会話できない問題や、ちょっとしたハプニングはあったものの）効率よく調査ができたと考えている。

調査結果については、調査直後に取り急ぎ資料を整理して報告の準備をし、日本文化発表会の最後に、実地調査結果報告として簡単に発表した。各組の発表（調査）テーマは以下のとおりであった。

- ・露店の食べもの
- ・子供の遊び
- ・スポーツ
- ・民族衣装
- ・フィリピン革命の英雄
- ・パナグベガ祭

以上の、フィリピン文化と日本文化についての調査結果や発表資料は、『2018年度「フィールド実習（フィリピン）」調査報告書』（Sendai and Baguio Students Learning Cultures from each other: Research and Presentations in the Study Tour to the Philippines 2018. Cultural Studies Department, Miyagi Gakuin Women's University）に収録されている。

## 学生による訪問施設の紹介（一部のみ）

### コルディリエーラ博物館

バギオのフィリピン大学の中にある博物館であり、コルディリエーラの民族や、伝統や、文化についての展示がされている博物館である。展示品には、織物、衣装、中国や台湾、日本からきた壺、装飾品、置物などがある。博物館の中に入ると、コルディリエーラの伝統的な家のレプリカがあり、実際に中に入ることができる。入ってみると、中にはゴングが吊るされてある。これは祭りや、儀礼の時に使われる。天井の柱にはトカゲや亀の彫刻がある。これは幸運の象徴とされている。そして、家の外には大きなベンチが置かれてあり、これはお金持ちの証として置かれている。その隣には小さな模型があり、建物全体の構造を一目で理解することができる。

この博物館には蠟人形が何体かあり、民族の姿を写実的に表している。伝統衣装や装飾品や刺青が細かく入っている。刺青や織物は上流階級の人という意味があり、刺青の入れ方によってそれぞれ意味がある。この博物館は一つ一つの展示品に、細かい説明がついているため、非常に理解しやすい。さらに、民族の生活の様子が写真でも展示されているため、実際にどのような生活を送っていたのか感じるすることができる。（鈴木結子）

### タムアワンビレッジ

タムアワンビレッジは、先住民が暮らしていた当時の景観がみられる、公園のような場所である。職人が、イフガオ族の伝統的な家屋を再建した。中に入ると、順路が書かれた村の地図が渡されるので、それを見ながら山を散策するように歩く。タムアワンビレッジには、現在7つのイフガオ族の家と2つのカリングの家があり、これからが道中にポコポコと現れる。タムアワンビレッジの家は、各家のできた地名にちなんで命名されている。イフガオ族のものは、Bangaan Hut, Anaba Hut, BatadHut, Dukligan Hut, Kinakin Hut, Nagor Hutがあり、カリングのものは、Luccong とBugnayがある。ギャラリーとなっているBugnay Hutを除き、これらの家には1人500ペソで泊まることができる。さらに、現代アート作品も展示されていたため、先住民の伝統的な生活と、現代アートのどちらにも触れることができた。その他、今回は行かなかったが、カフェもあり、タムアワンミールというメニューを見かけたので、機会があればまた訪れたい。（大本成美）

### ベンカブ美術館

バギオ在住のアーティストを中心に、フィリピンの現代作家の作品をおもに展示している美術館。他にも民族の彫刻や椅子なども展示されていて、現代アートだけでなく、伝統的な文化にも触れることができる施設であった。日本人とフィリピン人の夫婦の絵や、日本軍が描かれていた風刺画、生命の力を強く感じさせる作品など、テーマ別に展示スペースが分かれており、軌道のスペースや、統一感のある室内のデザインでとても居心地のいい空間で作品と対峙することができた。敷地内には庭もあり、モダンではあるが、フィリピンの大自然を感じることができる。日差しは強かったが、外に出て景色を眺める価値はあり、時間があればもっとゆっくり散策することができるくらいの広さがあった。

この施設だけではなかったが、スタッフの学生が展示解説を行ってくれた。普段生活す

る中で、博物館や美術館の展示解説はボランティアの中高年の方々しか目にしたことがなかったの、教えることで身につくという学習方法にはとてもいい環境であると思った。  
(村山佳穂)

### サンチャゴ要塞

サンチャゴ要塞は、マニラの城壁都市であったイントラムロスの北の一角にある。スペイン軍やアメリカ軍がフィリピン支配の時代に使用した重要な軍事施設であり、太平洋戦争時には日本軍の拠点としても使われていた。戦争で破壊されてしまったが、修復されて今の姿になっている。現在はフィリピン支配の歴史を残す施設として観光地となっていると同時に、現地の人には公園としても親しまれている。ゲートを潜ると整備された広場になっており、右手にはかつて貿易品の倉庫であった赤煉瓦造りの建物がある。サンチャゴ要塞は一度中国の海賊に占拠された経験を持ち、外側の壁にはその争いの面影が残っている。倉庫の中は広く、天井が抜けており、アーチ状の梁が等間隔に張られている。広場を奥に進むと水が溜まった堀や、スペインのマークが彫刻された石造りの門があり、その先には刑務所跡が残されている。そこにはフィリピンの独立運動を行ったホセ・リサールが処刑の直前まで幽閉されており、フィリピンの英雄である彼の記念館として公開されている。(井波瑠美紗)

### サンアグスチン教会

サンアグスチン教会はマニラのイントラムロス城壁内にあるフィリピンで最古の教会だ。現在はユネスコ世界遺産にも登録され、多くの観光客が訪れる。教会内はスペイン・アメリカ時代のキリスト文化についての博物館と、壮大な教会になっている。

イントラムロス城壁を通り、車ですぐのところまで古風な大きい門がある。人が3~4人分の高さはあるその門は模様が彫られ、石壁がさらに時代を感じさせた。しかし、内装は現代的にアレンジされている。イエス・キリストの処刑されている様子の像や、ミサで使われていた神父の衣装・キリスト教に関する多くの絵画・サントニーニョ像が展示されていた。教会内には墓地もあり、お墓参りにも人々が訪れていた。

奥の方にある礼拝堂は、複雑なシャンデリアや、現在も使えるパイプオルガンがあった。かなり高い天井はドーム型で、細かく刻まれているように見える天井は実は描かれたものだった。一見華やかに見える礼拝堂は祈る人もいて、重々しく神聖な雰囲気だった。(佐々木亜珠)

### 華僑博物館

華僑博物館はマニラにある博物館である。

「華僑」と聞いて、フィリピンとどのような関わり合いがあるのだろうかと思う人も多いのではないだろうか。実際、私はそう思っていた。しかし、この博物館にある展示物からは、フィリピンの人々と華僑の人々がどのような知名狩りを持っていたか、彼らがどのような歴史を歩んできたのかを感じ取ることが出来る。中でも私が最も印象に残っているのが「ホセ・リサールと華僑の繋がり」についてである。ホセ・リサールについての家系図の展示には彼の父方、母方の人々について細かく書かれており、彼が混血であることが一目でわかるようになっていた。彼が混血であるということは知っていたが、このように複雑な家系に生まれていたのだということが分かった。

他にもエミリオ・アギナルドやゴンザレス、ブルゴス、サモラの三神父についての展示もなされており、「フィリピン革命」について関心のある私にとって非常に興味深く、考えを深めることの出来た博物館だったと感じている。(佐々木花津)



